

「6月23日 沖縄 慰霊の日」

2018年06月25日

6月23日は「沖縄 慰霊の日」である。「捨て石作戦」であった沖縄防衛を託された牛島満中将が自決したとされる6月23日が「沖縄 慰霊の日」と定められた。牛島中将は、「生きて虜囚の辱めを受くることなく、悠久の大義に生くべし」と各部隊に打電したため、自決後も戦闘は続けられ、追い詰められた摩文仁が最後の激戦地になった。その摩文仁の「平和祈念公園」で今年も6月23日、「沖縄全戦没者追悼式」が行われた。

式典で、14歳の相良倫子さんが「生きる」という平和の詩を朗読された。曾祖母の思いを継いだ詩だそうで、感銘を受けたので、その一部を転載したい。

《私が生きている限り、こんなにもたくさんの命を犠牲にした戦争を、絶対に許さないことを。もう二度と過去を未来にしないこと。全ての人間が、国境を越え、人種を越え、宗教を超え、あらゆる利害を超えて、平和である世界を目指すこと。生きる事、命を大切にできることを、誰からも侵されない世界を創ること。平和を創造する努力を、厭わないことを。あなたも感じるだろう。この島の美しさを。あなたも知っているだろう。この島の悲しみを。そしてあなたも、私と同じ瞬間（とき）と一緒に生きているのだ。今と一緒に、生きているのだ。だから、きっとわかるはずなんだ。戦争の無意味さを。本当の平和を。頭じゃなくて、その心で。戦力という愚かな力を持つことで、得られる平和など、本当は無いことを。平和とは、あたり前に生きること。その命を精一杯輝かせて生きることだと言うことを。》

続いて翁長雄志県知事が、がん治療を受けておられ、痩せられたようだが、格調高い「平和宣言」を読み上げられた。一部を転載したい。

《平和を求める大きな流れの中にあっても、20年以上も前に合意した辺野古への移設が普天間飛行場問題の唯一の解決策と言えるのでしょうか。日米両政府は現行計画を見直すべきではないでしょうか。民意を顧みず工事が進められている辺野古新基地建設については、沖縄の基地負担軽減に逆行しているばかりではなく、アジアの緊張緩和の流れにも逆行していると言わざるを得ず、全く容認できるものではありません。「辺野古に新基地を造らせない」という私の決意は県民とともにあり、これからもみじんも揺らぐことはありません。これまで、歴代の沖縄県知事が何度も訴えてきたとおり、沖縄の米軍基地問題は、日本全体の安全保障の問題であり、国民全体で負担すべきものがあります。国民の皆様には、沖縄の基地の現状や日米安全保障体制の在り方について、真摯（しんし）に考えていただきたいと願っています。東アジアでの対話の進展の一方で、依然として世界では、地域紛争やテロなどにより、人権侵害、難民、飢餓、貧困などの多くの問題が山積しています。世界中の人々が、民族や宗教、そして価値観の違いを乗り越えて、強い意志で平和を求め協力して取り組んでいかなければなりません。そして、現在の沖縄は、アジアのダイナミズムを取り込むことによって、再び、アジアの国々を絆（つな）ぐことができる素地ができてきており、日本とアジアの架橋（かけはし）としての役割を担うことが期待されています。》

その後、安倍晋三首相が、「基地負担の軽減の結果を出す決意」という決まり文句で、普天間基地を辺野古に移転する工事を続行するという内容で、翁長知事と真っ向から対立する挨拶をした。式典を見聞きし、抑圧する者は虚しく響く言葉しか持たないが、抑圧されている者は真実の言葉を紡ぎ出すということ、二人のスピーチから、目のあたりにした。戦前、戦中、戦後と構造的な差別と抑圧の中に置かれた沖縄からの言葉にどう向き合えばいいのか。